

第 66 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 銀賞

町田市立鶴川第二中学校 1 年

杉本 咲凜

課題 ③

平和と安全、貧困、気候変動など世界中で様々な課題がある中、国際社会が優先して取り組むべき課題は何か。

副題

なし

本文

3

私は合唱部で、とある大会で「カナカナ」という曲を歌うことになった。私はあまり「カナカナ」という言葉を聞いたことがなかった。

大会の数日前、顧問の先生から、カナカナの話をされた。カナカナは昔、よく鳴いていたひぐらしの別名のことで、よく朝か夕方に鳴いていた。広島夏の日常に響いていた音だった。

そして、原爆が落ちた時の話をされた。原爆で被爆した親子の母親が「私の子供は生きていますか?」と、周りの人に聞いたらしい。だが、赤ちゃんはすでに息を引き取っていた。だが、聞かれた人は「大丈夫だよ。生きてるよ。」と言ったそうだ。でも、母親も自分の子供がすでに息を引き取っていたことはわかっていた。でも、パニックだったのか、自分の動揺を収めるために、周りの人に質問をして動揺を収めることしかできなかったと思うと、心がぎゅうっと締め付けられるような気持ちになった。その親子の話をすると顧問の先生は泣いてしまった。私も改めて原爆の恐ろしさを知った。先生は最後にカナカナの話をした。原爆の熱によってカナカナが広島からカナカナの大合唱が聞こえなくなり、今は日本は都市化により少なくなってしまった・・・と話してくれた。そこで、カナカナの意味がようやくわかった。カナカナは人々の日常にあった当たり前のもので、原爆によって一瞬で焼け死に、当たり前がなくなってしまった・・・というのだとわかった。数分後、別の顧問の先生からも、被爆した時、人々の皮膚は熱でドロドロ溶け、それで壁にくっついたり、母親が子供を抱きしめ、そのまま固まってしまっているという話を聞いた。私はその日カナカナの意味と原爆がどれだけ悲惨なものだったかを頭の中で駆け巡らせていた。

その数日後、合唱部に外部から講師が来てくださった。その先生はカナカナについてこう話してくれた。「ある人が『敵軍は広島を攻撃してきた。』』といったが、その講師の知り合いは、「攻撃しに来たんじゃない!殺しに来たんだよ!」と、言ったらしい。殺しに来たんだよ、という言葉は私の心に深く突き刺さりました。

8月6日の原爆が落ちた日、8時15分になって、私達は先生の合図で合唱部全員で黙祷した。私は、もう二度とあの悲劇が起こりませんようにと祈った。数時間後、私は家に帰って原爆について報

道されていたニュースを見た。そこでは、皮膚がドロドロに溶けた再現人形を平和記念館に飾るが、子供に相当なトラウマを与えてしまうという報道をしていた。「原爆の悲惨さを伝えるためにも、作りもので若い世代にも伝えようと思いました。」と、インタビューを受けた人は言った。でもその時、カナカナは原爆の悲惨さを色んな人に伝える力がある曲で、私達はカナカナを歌うことで、原爆の悲惨さを伝えることができると思った。

私にはあの原爆が二度と投下されないでほしい。そして、原爆が投下された原因の一つの戦争は自然災害ではなく、人が起こす災害のようなものであって、戦争はどんな理由でも起こってはならないものだが、今も戦争が続いているのは、命がなくなるということ、戦争での恐怖、何もかも失ってしまうこと、見るにも見れない悲惨な現場・・・それをあまり近年になると知らない人が増えてきている。そんな原爆の悲劇を合唱で伝えることによって、戦争が二度と起きないように伝えられる一種のメッセージを私はできると思った。私が国際社会で優先して一刻も早く取り組むべき課題は、戦争です。戦争は人々の日常の「音」を一瞬でかき消し、絶望の音が鳴り響く日常に変わってしまいます。私は、私達の日常で鳴っている日常の音をいつまでも、いつまでも、響かせたいです。